



地域教育力アップ戦略ノート

讃岐幸治

はじめに

子どもたちは地域社会を基盤に多様な活動をしていくことが大事だ。
高度経済成長期を境にして、農村的な地域共同体が崩壊し、地域は活動の場でなくなった。
人情より金銭、公共より私事、連帯より自由が重視され、つながりがなくなった。
「他所の子のことまでかまっておれない」「俺はわれのやりたいようにやる」「隣の家と付き合いのは憂鬱だ」など、自由気ままな生き方が求められはじめた。
地域からの拘束を嫌い、公的な縛りを嫌い、他者とのかかわりを嫌いはじめた。
根無し草化(地域離れ)、私事化、無縁化し、地域から暮らしがなくなった。
地縁に基づく人との付き合いは希薄化し、共同作業することもなくなった。
「見てみぬふり」の風潮が蔓延し、自由と無関心を強め、孤独なる群集になった。
相互扶助、われわれ意識、「情けは人のためならず」ということがなくなった。
地域は単なるネグランド化し、「コミュニティなき地域」になった。
地域の子どもは地域の子どもとして育てようという風土やしきみが消滅した。
地域行事もなくなり、地縁社会、地縁による「子育ての共同性」がなくなった。

「私事化」、「分業化」、「依存化」の流れはとどまることがない。
地縁を基盤とする地域コミュニティを復興させることは無理だ。
地縁に代わって、新たな「子育ての共同性」を構築する必要がある。
新たな「子育ての共同性」を構築する道はあるのか。
NPOなどにみる「公共」、「連携」、「自治」を志向する流れがある。
志縁による「公共」、子縁による「協働」、居縁による「自治」づくりがみられる。
地縁に代わって志縁、子縁、居縁に基づく「子育ての共同性」が生まれつつある。
新たなコミュニティのもと三つの「きょういく」を活発化させていく必要がある。
志縁に基づく「興育」、子縁に基づく「協育」、居縁に基づく「郷育」の構築を。
どのようにして、これら三つの「子育て共同体」を構築していくか。

I 志縁による子育てコミュニティ・興育コミュニティ。

1.有志による子どもの多様な組織化

地縁に基づく子育て共同性は衰退した。地縁、血縁関係が緩んできた。

地域行事もなく、子どもたちが地域で遊ぶこともなくなった。

いじめ、万引きなどが起こっても、それに対して無関心・無頓着・無責任な態度。

成長のためには、多様な人とのかかわりや豊かな体験が必要である。

地域にあって、子どもたちにそんな機会を提供している人たちがいる。

あるテーマ、目的のもと子どもたちを組織化し計画的に活動している。

ミッション、パッション、ハイテンション。

フットワーク、フィールドワーク、ネットワーク。

作法・習い事的なものから無人島探検など先駆的なものまで、多種多様だ。

活動条件もさまざま、経費・期間・資格なども多様である。

活動内容もさまざま、環境、冒険、伝統文化、そろばん、書道雌、武道など。

活動形態もさまざま。

1. スイミングクラブ、バレー教室、習い事など、営利型の組織。
2. 放課後子ども教室、公民館のわんぱく教室など、行政運営の組織。
3. 子ども会、愛護班など地域を基盤とする地域型組織。
4. 使命感をもった人たちが子どもたちを組織化したNPO型組織。

営利型、行政型、地域型、NPO型の組織がどれだけあるかが重要。

志をもって「この指とまれで方式」で活動しているNPO型が斬新だ。



2.有志による子ども組織の特徴と問題

NPO型の組織は特定の思いや願い、志に基づいて組織したものである。

その目的や方法に納得したものだけが参加し活動している。一種の結社である。

特定の大人と一部の子どもで構成されるコミュニティである。

志・理念・目的のもとに結集した組織であり、志縁による会、私塾生など。

そこでは意図的に計画的に教育が行われる。

あえて教を興すという意味で「興育」、強いて教えるという意味で「強育」である。

地縁コミュニティに対して、テーマ・コミュニティ、または興育コミュニティ。

訓練・鍛錬を必要とする活動を行うのには、こうした組織においてである。

目的・方法に納得したものの同志の集まりであり、自由にやれるというよさがある。

先駆的な活動がやれるが、参加を強制できず、子どもを集めるのに苦労する。

周囲から理解されず、変人扱い、孤立しがちである。孤軍奮闘。

似たもの・仲間内での活動となりやすく、活動が独善的なものになりやすい。
資金の確保困難、後継者不足、子どもの確保などの問題がある。
グループの孤立化・閉鎖化、また事業のマンネリ化などに陥りやすい。
志縁による子育ての共同化は、特定の大人と子どもによる共同化に過ぎない。
特に限られた範囲のなかでの子育ての共同性であり、大海の小島の如きもの。

3.体験をより確かな学習へ高めるために―体験の経験化―

有志による子どもの組織的な活動は、体験活動を主とすることが多い。
その場合、ただ体験すれば言いというものではないということである。
体験したことをより確かな学習へと高めていくことが必要である。
体験を素通りさせないように、それを経験化していく必要がある。
そのためには、つぎのように「体験的学習法」を取り入れてみることだ。
「何らかの体験をすれば、そのことだけで、学習したとするものではない。今、
ここでの体験によつての気づきにこだわり、さらには、ともに体験して、気づいたこと、
感じたことをわかちあい、その解釈から、学びを深めて、次の行動へと生かしていく――
教育方法」である「体験的学習法」を取り入れることだ。
(『野外教育指導者読本』 野外教育指導研究会編集・発行 1999年)
つまり、1. まずやってみて、2. その体験したことを一人ひとりがじっくりと「ふりかえり」
(熟慮)、3. それを他者と「わかちあい」、4. さらに自由に話し合いさせる(論議)、
5. それを通して「学びを深め」(熟考)いく。こういう過程を通して経験化させていくことである。



4.子どもの育成グループのネットワーク化

豊かな体験や多様な人とのかかわりは、数多くのサークルや団体があることだ。
有志による子どもの組織活動が生まれやすい風土・しくみをつくる必要がある。
活動資金の援助、活動場所や人材・資材などの情報提供、援助などを行う。
それぞれの活動の様子が分かる祭典や情報提供の実施。
それぞれは活発であれ、孤立しており、点として活動している状態にある。
孤立しているために閉塞感・自信喪失・マンネリ化に陥りやすい。
交流し刺激しあい、元気やノウハウを分かち合い、進化していく機会がある。
特に行政の枠、地域やジャンルを超えて出会える機会がある。
それぞれの出番づくりを通して、自己アピールによりそれぞれの認知度を高める。

志をもって立ち上げた人、立ち上げようとする人にやる気・自信を持たせること。出会いを通じて刺激しあい、アイデアを交換し合い、相互に高めあっていく。相互の交流・理解・信頼づくりをすすめる、それぞれの枠を超えたつながりを。環境と伝承文化のグループとのつながり、海と山の地域のつながりをつくる。地域毎に地域内にある多様な子育てグループをネットワーク化していくこと。活動家のバンク化をはかり、地域教育を支える仕掛け人にしていくことである。

II 子縁に基づく協育コミュニティ

豊かな体験や多様な人とのかかわりを持たせようとしても地域に子どもがいない。地域に子どもがいないことには、地域の人たちが子どもを育てようがない。この問題を乗り越えようとしているのが、子縁による子育てコミュニティづくり。子縁に基づくコミュニティづくりという考え方が生まれてきたのか。

1. 分断化された子どもの社会

- 1). 子どもの問題の多発化・深刻化。
 - いじめの増加、まじめの崩壊、けじめの喪失が起こっている。
 - 身体力の不足、忍耐力の不足、連帯力の不足が起こっている。
- 2). 学校による子どもの抱え込み化。
 - 学歴主義化、学校の序列化、学校の受験教育化、
 - 学校の予備校化、子どもの抱え込み、学校の多忙化、
 - 学校の閉鎖化、学校の孤立化、学校の閉塞化。
- 3). 子どもの姿が見えない地域。
 - 学校の下請け化、宿題・塾通い、地域の空洞化。
 - 地域行事の衰退、同級生集団、異年齢集団の崩壊。
 - 地域知らず、地域の住民とのかかわりのなさ、実体験の欠落。
- 4). 学校と地域の不信関係。
 - 責任のなすりあい、相互不信、敵視・敵対化
 - 無理解、断絶関係、敵対的關係。
 - 子どもは股裂き状態、教育の相殺状態、子どもの病理化

2. 子どものために「協働化」を

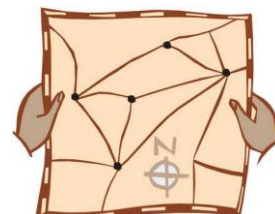
地域に子育ての共同性を再建したいが、今や地縁の時代ではない。地縁によらない、人々のつながり共同体をつくりあげられないか。学校は子どもを抱えこんでおり、汲々としている。学校支援は、学校は負担軽減になり、地域は子どもとふれあうことになる。子どものためという共通目的のもと、学校と地域が「協働化」していく。共通目的を達成するために互いに理解と信頼を深め、連携・協力していく。新たにできた人間関係や共同作業を通して、子育ての共同体をつくりあげていく。地縁に代わって、子縁を基盤にしてコミュニティをつくりあげていくのである。

分業論に基づく「連携」でなく、自己変革を伴う「協働」にもつていくこと。
学校支援地域本部の設置、地域教育運営委員会の役割。
協働の仕方としては、周辺から接近し、徐々に本丸へと近づいていくことである。
かかわり方—玄関=理解、客間=相談、居間また縁側=信任、台所=主役化。
活動の領域—環境づくり、安全づくり、行事参画、部活動指導、授業参画へ。
学校支援で終わるのではなく、協育コミュニティへもつていくことである。

3.協働化による教育活動—協育のあり方

子どもの育成のために、なぜ学校と地域が協働する必要があるのか。

- 1). 不足しているものが支援・補完しあうためである。
- 2). 分断しているものが協力・交流するためである。
- 3). 自己完結しているものが活用・応用するためである。



協働化のあり方を考えれば、たとえば、

- 「支える」—環境、安全、学習、体験などを互いに支援する。
- 「つなぐ」—情報、施設、人材、資材などを媒介結びつける。
- 「活かす」—機能、成果、人材、資源などを互いに活用するやり方がある。

それを基にしてみると、

- 1). 学校を地域が支える 「学校支援」という呼び方ができる。
学校は多忙で、子どもと接する時間がない。地域が学校を手助けする。
学校は授業に専念、地域による学校環境づくり、部活動指導、学習支援など。
地域による学校の応援団。
- 2). 学校と地域をつなぐ 「学社連携」という呼び方ができる。
学校と地域共同による総合運動会、校区文化祭、子ども祭りなど。
学校を拠点に地域の各種団体、機関、企業などが集い、活動。
学校が子育ての重要な場になる。駄菓子屋学校。第九コンサート。
- 3). 学校を地域に活かす 「地域活用」という呼び方ができる。
学校の施設、人材、学習成果、情報などを地域に活かす。
地域を学校の成果発表の場として活用。教材の地産地消。観光ガイド、
検地によるまちづくり。美術部による美化活動。



4.子縁に基づく「協育」コミュニティ

「協働」活動から「協育」コミュニティへ。

協働活動による人間関係と共同体験から新たなかかわり合いの誕生。

それは、地縁とはちがう、子縁に基づく新たな協育コミュニティである。

読み聞かせボラの会、PTA 役員会を基盤とした人間関係の生成。

協育コミュニティは、子どもにかかわる関係者によるコミュニティである。

校区文化祭の実行委員のメンバー、PTA コーラスグループなどによる共同体。

協育活動の活発化によって、各種のコミュニティの輪を創り上げていく。

「協育」活動の多様化による多様な人の巻き込み化を図っていく。

校区のだれもが企画運営にかかわれるテーマ(環境、福祉など)校区祭の実施。

「協育コーディネーター」が重要である。

ニーズ調整型コーディネーターだけでなくシーズ育成型コーディネーター

情報収集・提供の役、調整・仲介の役、組織世話の役、企画提言の役

地縁に代わって、子縁に基づくコミュニティづくりが起きている。

Ⅲ 地域力の醸成による地域教育力の構築

1. 地域の衰退、崩壊

都市部ではミーズム、無縁化、盛り場化など地域の崩壊がすすんでいる。

限界集落、子どもの減少、高齢化、廃校などで地域の崩壊がすすんでいる。

地域社会から人のつきあい、生産活動、伝統行事、しきたりが消えた。

地域の衰退、崩壊し、地域は教育力どころではない。

地域そのものが教育力をもっている。

汚染され、悪臭が漂っている地域がいい影響を及ぼすはずがない。

危険で、犯罪の多い地域が子どもにいい影響を与えるはずがない。

住民が地域をつくっていく姿・生き方こそ、最大の教育である。

地域が自然に及ぼす影響を「薫育」という。



2. 阪神淡路大震災－地域力の再生

阪神淡路大震災をきっかけに地域に対する考え方がかわりはじめた。

行政の対応に限界、行政依存から民間の力を見直す動きが起こってきた。

地域の課題解決のためには多様な当事者が協働して取り組んでいく力が必要。

それを地域力、地域の底力と呼び、それを醸成する動きが始まった。

地域力とは地域への愛、互恵力、課題解決力、自治力からなる。

地域力は自主的にかつ協働して地域課題を解決していく力である。

地域力は地域の協働力にかかっている。

協働力は「熟議」を核に展開する。

住民、NPO、企業、行政などが協働していくためには、同じ土俵にのる必要がある。

協働化するとは目標や情報、資源、規範などを共有化していく過程である。

協働化していくためには、それぞれの立場の「わかりあい」、仕事の「わかちあい」、アイデアの「出し合い」、役割の「支えあい」、互いの考えの「練りあい」などがなければならない。

そのためには熟慮と討議、つまり「熟議」を積み重ねていく以外にない。

逆に言えば「熟議」を抜きにしては共有化できず、協働化は一步もすすまない。

協働化は熟議のプロセスにほかならない。

熟議は体験のふりかえりであり、体験についての話し合いである。

地域づくりとは地域力の育成・強化のプロセスである。



3.地域力と地域教育

地域力には地域防災力、地域観光力などがあり、地域教育力もその一つ。

地域教育力とは地域そのものがもつ教育力、郷土で育てる力・「郷育」である。

郷育は「地域を学ぶ」、「地域で育つ」、「地域を創る」力を育てる教育である。

大人たちが地域に学び、地域で育ち、地域を創っていく活動にかかわっている。

それらの大人たちに触れながら子どもたちは育つていくのである。

郷育の内容としては、たとえば

1). 地域を学ぶとは

教材の地産地消 しきたり・風習、地域遺産・伝統・歴史を学ぶしくみ、
古老の知恵袋づくり、地域・ふるさと学、タウンウォッチング・町発見、
マップづくり、まちの「語り部」、ふるさと考古館などの活用。

2). 地域で育つとは

地域行事とのかかわり…とうとう祭り、七草粥、夏祭り、相撲大会
子ども組織とのかかわり…ども会、稚児組など、ボーイスカウト、
隣近所とのつきあい…助け合い、声の掛け合い、パトロール隊
伝統行事とのかかわり…獅子舞、地域の伝統太鼓、注連縄づくり
しきたり・風習の伝承…正月の迎え方、お盆のしきたりなど。

3). 地域を創るとは

安心安全 (safety) …全マップづくり、防火防災への取り組み
環境美化 (amenity) …海岸ゴミ処理、まちのデザイン化、植樹祭
福祉健康 (humanity) …おもちゃ病院、車椅子のメンテナンス
産業活力 (vitality) …商店街出店、各種商品開発、みかん検定
教育文化 (identity) …若者祭り、遊びの祭典、子どもの宿題調べ、

などを考えてもいいだろう。

おわりに

地域教育が、どのようなコミュニティを基盤にしているかによって、三つの層に分けられる。

一つは志縁に基づくボーイスカウトなどのコミュニティで行われる興育。それは明確な目的に基づいて組織的・計画的に、もっぱら顕在的にかつ意図的に行われる。志縁に基づくNPOなどの組織的教育がこれにあたる。

もう一つは地域と学校が協働して行う教育といってよく、子縁に基づき学校と地域が協働してつくりだすコミュニティのなかで行われる教育である。これは必要に応じ随所、随時に行われ、部分的には顕在的に、意図的に多様に行われる協働による教育、協育と呼ぶものである。

三つ目に居縁に基づくコミュニティで行われる郷育がある。地域づくりに取り組む過程での立ち振る舞いや人間関係のあり方、ものの考え方などに触れることを通して身につけていく教育である。

以上のように地域教育というのは、志縁による興育、子縁による協育、居縁による郷育から成り立っている。

地域教育の担い手からみれば、子どもの組織化活動による興育は、特定の意図をもった人たち。

学校と地域との協働による協育は、校区の教師、住民、団体など。地域づくり活動を通しての郷育は、地域に住んでいる住民たち、から成り立っているとみることができる。

それら三つの地域教育の特徴をあげるとすれば、興育は点による鍛錬的教育、協育は線による訓育的教育、郷育は面による薫育的教育を主とする。

地域にはそれぞれ特有の歴史、事情があり、その違いによって地域教育の進め方も違わざるをえない。

権利要求型住民層の多い地域は、志縁に基づくコミュニティづくりから。地域無関心住民層の多い地域は、子縁に基づくコミュニティづくりから。地元共同意識の強い地域では、居縁に基づくコミュニティづくりから。

地域教育を推進していく、その地理的エリアの範囲をどうするか。

関係者が協議し、運営していく拠点をどこにするか。

エリアごとの教育方針がどう創り上げていくか。学校を含めて。

その拠点の事務局体制をどうするか。

どのような財源、権限、資源をもつようにするか。

教育委員会や首長部局との関係をどうするか。

遠からず、それぞれの地域で検討が始まるであろう。

部分的には検討し、実際に動いているところもあるが。

